

本尊美翁の日本研究と其人格

本會理事文學博士

加藤 玄 智

始めて本尊美翁を私が知つたのは大分古い事で、私が曾て士官學校在職當時、香港で翁と面識があるといふ軍人から紹介されて、學校の應接室で會つたのが初対面であつた。西洋人だから洋服かと思つてゐると、紋附の羽織袴に朴齒の下駄といふ純日本式な服装で、言葉も日本語であるので、普通の西洋人とは一種違つた感じを其初対面の時から受取つた。其の後私は、大正七年に香港マニラ其の他の研究旅行に赴いた時、香港で又翁と會つたが、其の時恰も翁は香港總督の秘書官を勤めてゐられて、色々私の爲に世話をして下さつた。本日持參して陳列品の中に加へて貰つたのは、當時の記念寫眞であつて、翁と私の外に三井物産の津田弘視父子、後方の蹠のある人は日本人小學校の先生、其の脇にゐられる二青年は、當時香港大學で本尊美翁の教育を受け、今回翁の逝去に際しては、其の臨終まで實に親身も及ばぬ看護をされた谷村秀等、栗林一二の二氏である。ところが此の寫眞について殊に面白いのは、翁が洋服姿であること、いつも日本服ばかりで夏でも絹の羽織に衿卷をし、朴齒の下駄穿き姿でゐられる翁としては、實に珍しい記念寫眞であると思ふ。日本に來住されたのは大正九年であるが、日本研究に熱心な翁は、本會が明治天皇の御記念事業で日本の精

神文明を海外にも發表紹介する目的を以て努力してゐることを知つて、直に終身會員となられたのみか、屢々筆を執つて、其の研究を本會紀要に發表せられ、又、「君と臣」といふ題で、本會例會の席上で講演された。其の講演は本會紀要に掲載した外、小冊子としても刊行したが、最近に出た杉浦重剛翁の倫理御進講草案を拜見すると、其の中に本尊美翁の「君と臣」との話が出てゐて、外國人にも斯ういふ日本觀を持つてゐる者が御座りますと云ふ事を、畏くも

今上陛下（當時は皇太子殿下であらせられた）の宸聽に達し奉られた事を承知し、本尊美翁も死して餘榮ありと感ぜられた事であつたらうと思つた。そんな風で翁は本會の爲に執筆もされ雄辯も揮はれたのであるが、東京の外、大阪の天満宮で地方講演會を開いた時にも、特に出向いて本會の爲め講演された。翁の論文は、本會紀要の三十一・三十六・三十七・四十・四十三・四十四の各巻に出てゐるが、それ等は何れも皆日本に關する題目のもので、昭和御即位式の體験、官幣社と御祭神、或は大倭神社、丹生川上神社、八十島祭等に關する専門的な研究である。其の他、日本郵船會社の爲にも船名の研究を發表されてゐるが、それは同社の船には香取丸、鹿島丸等神社名に因んだものが澤山ある爲、翁の神社研究の蘊奥を傾けて執筆されたのであつて、凡て神社方面の研究については、普通の日本學者も及ばぬ位であつた。殊に又、我々の深く感ずるのは、翁が單に文獻に依るのみでなく、實地に諸方の神社をおとづれて、親しく研究せられた事であつて、時間と經濟、共に餘裕があつた爲もあらうが、其の研究成果は實に微に入り細を穿つものがあつた。翁は斯の如く眞面目な研究者であつたが、同時に又、正直至誠の人格者であつた。此點で翁は、神道の眞の體験者と云つて好む。翁は會て英國の *Journal of the Royal Anthropological Institute* (Vol. LXI, 1931) に神道關係の論文を出された事があるが、其の文に於て翁は、日本の當局者は神社を宗教と見てゐないが、自分は一の宗教であることを斷言

すると書いた。これは予が宗教學上の研究から達した研究結果と合致するので、知己を得たことを嬉しく感ずると同時に、翁が自己の信ずる所を、赤裸々に怯めず臆せず發表して憚らない性質を愉快に思つた。翁の文章は非常に讀みにく
い上に、其の研究が枝葉に亘つて甚だ微細を極めるため、思想の大體を達觀するのに困まらされる。獨逸文の比較ではあるが、カントが純粹理性批判を書いた筆法で、日本歴史に關係したことを翁が書いてをると云へば、當らずと雖も遠くはあるまい。其處に翁の眞摯な學者的性格が現れてゐる。日本に來る外人の中には、言動の不一致な人もあつて、日本滞在中は其の言ふ所又書く所に於て、日本人の氣に向くやうにし、あちらへ歸れば、赤の他人と云ふ風なものもある。本尊美翁は、それ等の人々と全く撰を異にしてゐるのであつて、日本にゐても何處に居ても、確信を以て物をいひ又書く所に、尊敬すべき人格の反映があると私は考へる。私は曾て英國に旅した時に、ロンドン郊外の本尊美邸で一夜の客となつたが、其の邸は石造の宏壯なもので、外には蔦などが匍ひ纏はり、如何にも落ちつきのある舊家らしい家であつた。何でも源賴朝時代頃に當る古い家であると云ふ事であつた。翁が正直至誠、何處までも自己を偽らぬ人である事は既に述べたが、私の一泊した朝、翁の姿が見えぬので、尋ねると、翁は教會に行かれたと家人から聞いた。神道研究家ではあつたが、信仰は信仰として立て、漫に迎合せず、死ぬ時は、やはり一個の基督敎信者として葬られて行つた處に、翁の眞摯な面目の躍如たるものがある。其の眞摯な人格といひ、其の深い日本研究といひ、翁の如きは、交れば交はる程一層感服せざるを得ない人物であると云つてよからう。日本の神道學者としては、平田篤胤翁あり、本居宣長翁あり、更に伴信友翁もあるが、平田は華やかな雄辯達筆を以て優り、本居は眞面目にして而も尊皇精神の基調に立つた信仰があるのに對し、信友の研究考證には、他の追隨を許さぬ精確緻密な史的考證があり、誠にじみな考證の誠實さが

ある。是等の三大人に比べると、本尊美翁には平田の華やかさはないが、其の眞面目な好學的な態度に於て本居翁に比すべく、其考證學風に於て伴信友大人に一脈相通するものがあると思ふ。此の點で本尊美翁は、外人の神道研究者中、決して他の追隨を許さない第一人者であつた。

本尊美先生性格の一面

立正大學教授

尾 野 稔

翁が甚だ熱心な神道研究者であつたことは、既に加藤・星野兩先輩も云はれた所であるが、先生の神道研究は實に堂に入つたもので、殊に最後の十年間は神道即ち先生の生活と云つてもいい位に、それは熱烈な深いものであつた。併し先生は決して親日の押賣をしたり、時勢に阿ねつたりはされなかつた。故に神道の研究者ではあつても、英國人として其の國教を捨てられはしなかつた。そして而も其れは實に熱烈な信仰であつた。一昨日も下加茂教會で聞いた所に依ると、翁は日曜日には、どんな時でも必ず朝の七時半には教會に參られたさうで、而も約三時間も跪いた儘で黙禱されたと云ふ事である。それ程の強い信仰であるから、旅行中でも教會のある所では、必ず參られた。東京では芝白金三光町の聖公會に、やはり朝の七時半には參られたさうであるが、教會のない地方では、其の時刻に三十分乃至一時間黙禱